



種相表

蟬丸せんがうやま半月夜話後篇卷之四
傳記

江戸 白頭子柳魚編次

第拾七回

健男銳劍光



其とた無腸道人の牛頭六馬頭七の對ひ声をひそめて。さう駭きそ穴生兄弟。昔を誰とも思ふ。木曾の山中にて汝等兄弟と義を金鍊と結びくる。熊子荒夜又か遺腹の子ある蟬丸あり。姿容衰へしれが見らざるも理あり。昔昼のやど汝等が来りし時。竊に新色見て其牛頭六と名告る者の穴生の小六ふりて馬頭七と呼ぶ者。小七ある事を知らず。又這家は

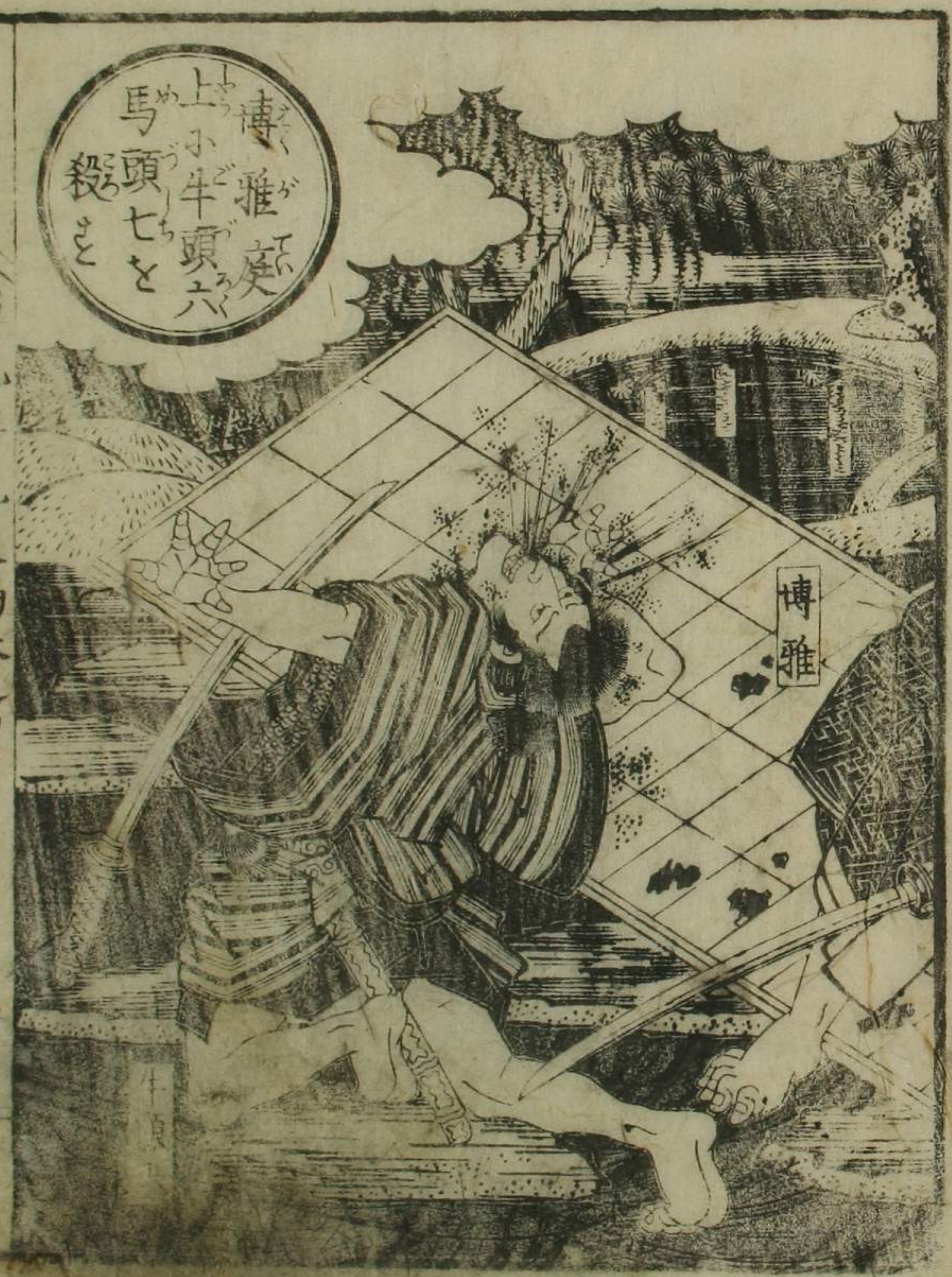
飯島三省

招ふが一層の力とあり多んと思つど入こむ手段なく。奈
何のせんと按ぜし。文太夫一人の娘ありて殊に
これを愛せしむ。これ幸ひと夜ふまされて私に家
潜びこそ小碓が熟睡しし。所をうろち。渠が髪
の毛鉄の粉をまぶし。扱又その居室の天井の上は大
きやうなる礎石をあぐ置き。渠が髪
の毛自とそ
さるゝ逆立ちし。これに父駭き物怪ならんと。あ般加拈
祈禱するといふ。どる一点むろもあらず。あ。頓く昔
変を傳へし。招ふれ。これに爲課し。と来てか。おさる
さるをばして。煮く所持ふ。と製の短冊を入れ。

錦の衾をいひ。うき。あ。ね。梵字を白帝。あ。うき。靈符
あ。うき。偽く水は入髪。の毛を濡か。これに彼鉄気太
うて頓は髪。の逆立ち。治り。これに文太夫。歡び。吾を
家。ふ。と。あ。て。他事。あ。く。管待。と。帝心。憎き。彼博雅
あ。うき。這奴。今宵。の酒を過し。熟睡し。し。と。思ひ。兄。
汝等。忍び。入り。這奴。を殺し。其荷物。の裏に。探り
我奪れ。一。觸。體。を取返。し。られ。と。始。終。を。詳。し
説。示。さ。し。兩。人。の。殆。く。感激。し。扱。ハ。蟬丸。君。よ。こ。お
己。せ。し。う。世。に。好。薬。も。あ。る。の。う。る。実。は。一。点。を
かり。も。昔。の。面。影。る。し。何。ん。と。も。あ。れ。這奴。を。殺し。

博雅
上
馬頭七
殺

彈丸傳記後編卷之四



馬頭七

師父君の白骨をバヤビく奪ひ返さべし。田心
うれ我君とぞより蟬丸大きな歡び。音倩文太夫
状を見るふよりぞ質素淳朴めしてあつく大義
ころのべき器あらし。長く爰止らば却て這奴お
怪しめらるべし。されば今宵私に此家を立さるべく
思ふも。汝等為負ふ此村尽すの城隍の祠まで
来れり。共侶も他国に走り又東も西も術あらんと
辭をつかひ蟬丸のりの室ふりぬ兄弟の瑛くつら
博雅が居る方の別室は窺ひよる。寂として音
障子の破れより覗見れば灯火をぞ消えんとて

うしろあられとぞ寐しと思しき。為課せし牛頭六
いづ静は障子を明く。その入る博雅が
夜着の上ふく。刀を抜き只一突と突とふ。更
み殿も立む。奈何と駭く。所は忍屏風の蔭より。
博雅の白刃を携へて飛で出牛頭六を只一刀は砍下
つ。苦と呼ぶ其声は表は在り馬頭士の兄牛頭六が
博雅を殺せしと思ひ兄貴首尾の。やと虚
入る水も。さふ首は宙に打落。賊あし。合
さし。と呼り。此声は駭た。文太夫の
燭を携へ奴僕を引連る離座敷は表。此處を見

まづ博雅ハクヤが恙しやうあきまゝなる火ひ燭しやくを照てらして其盜賊そのとうさくを
はらく見る。是こゝろは昼来ひるきる。一ひと思おもふ牛頭ぎやう六馬頭りくばとう七しちまで
有ありれば再び駭おどろかす。你おんいふ。一ひとて這奴等このやつらが思おもふ来きらん事こと
を察さつし給たまへ。最危さいあやうき事ことあり。さういふ。博雅ハクヤの打微うちう
笑わら都みなる物事ものごと。遠とほ慮おぼふ。たとき必かならず近き憂うれあり。さう古こ人の
格言こつげんあり。吾われ益えき這奴等このやつらを甚いく打微うちうら。一ひとて其恨そのうら
をうへ。さんて今宵こよひあり。忍しのみ来きるべ。一ひとと思おもふ。これ。わ。
甲夜よひふも多おほく酒さけを吞のむ。即房ふしど入いる。及およぶ。といふ。一ひとて
絶とて眠ねら。刀やいばを傍そば近ひきく引ひき。せ。少せうく。油断ゆだんせ。ば
一ひとて居ゐる。一ひとて最前さいぜん向むかふ。離座敷りざしきのく。こ。人音ひとおとせ。

ゆへ。竊ひそか出でる。飛石とひし傳つたふ。い。ゆ。垣根かきねのこ。さ。う。物
色ぶしきふ。這奴等このやつら。兩入りやうにん。彼かの無腸道人むぢやうだうにんと叫こゑき。居ゐる。何
事ことを相談さうだんやらん。あ。こ。い。遠とほく声こゑひ。く。れ。ば。分わ明ある。ま。と
う。さ。う。い。ふ。這奴等このやつらが。あ。の。び。入いる。一ひとて吾われを殺ころさんと
さる。べ。一ひとて察さつせ。ゆへ。荷物ふつは。夜具やぐ打うちき。せ。て。吾眠われねむる。
さ。あ。ま。も。て。は。し。屏風びやうぶの。う。う。う。う。隠かくれ。て。居ゐる。ま。接あひの。如ごとく
牛頭ぎやう六忍りくにんび。入いる。眠ねむる。と。思おもふ。夜具やぐの上うへより。尺一しちいつ突つと
突通つとつうを油断ゆだんを見みる。す。討取うちとつる。又一ひと入いる。その声こゑを
吾われも。う。と。心得こころえ入いる。所ところを打うちる。れ。が。こ。も。兩入りやうにんと。も。尺我しちが
一ひと刀やいばの。為ために。頭かぶを失うしなへ。る。吾われ今宵こよひ油断ゆだんして。熟睡じゆくすいせ。ば

渠等が為し屠らるべし嗚呼危うううと語るをゆづ
文太夫の殆く感激する心かけよた士の喜の音
みり目を覚めるとやん武士の用心さもある道れ
の勤たると賞へてやまに登時博雅の文太夫は對
の彼の無腸とやりの俳道人兼て心得がうかぬ
今宵の形勢をみてるとたれ牛頭六等が同類
ある疑ひも必取逃しぬる刀を取て先に進み
文太夫も実みりと點頭奴僕を引連れて跡は従ふ
向ふの離さしたる至る障子を斬と推ひらきて見る
後の壁をこがちて裏手より逃失うとおぼしめた為

身は博雅の齒がとをまゝ扱ひ最前の物音もいや
と喰ふううと見へる斯と知らぬ兩人のうち一人を
捕らえ攻問へ渠も素姓も知るへしは油断して取逃
せしこそ残念なる這奴さたは牛頭六は叫とた言
事あり汝思ひこぬか我奪れ一體荷物もうちみ
らんそれと恙なく奪ひ返してゆくとやめうさう
伏の體體との音云云のゆゑとめて小泊の濱辺にて得
る其體體の熊子の荒夜及が白骨とあるある
物添へるあは此體體這奴がりのあは這奴の其時人
を殺せぬのあて夷賊荒夜及る殘當あるべしと

一十と語り荷物のうちより帛紗と包と一羽體を
出しく見せられ。小磯もこれを見え人あれを先の
の疑をもちぬ。博雅の人と對ひ今のも時刻の
程延くれば所詮亦を追蒐るるや詮るゝとて牛頭六馬
頭七う尸を取捨をどるひまゝ夜に明つ斯りし彼兩人
み従ひゆく。血の池飯の山三途川あんと呼る惡漢
等ハ其魁首の討れとやういつとるあゝ逸失る程
は浦人等の歡ふ事なり。去る程は博雅の心を
むむ文大夫が家も出る事数月も及ひられいつ迄
爰は在らんや益なり。と思ひ告をて文大夫は告る月比

の思と謝しければ。文大夫も斯と笑ふ。その尤も右も
の意よりうへへとて。頻る百両の黄金も新らしく縫
立て衣一重と添へ博雅の辺に置さるゝみやう。親
の口よりいふも奈何まこと你兼て娘小磯と通るゝ容
子のいのちも知まど。そゝろゝぬみかて居りも何とそ斯
る人と婿兼ふと思へるなり。然るに你ハ又願ひ有る身と
て婚姻と兼引給ふは定めし深き子細有ると思
へば強て苗ごとし。倘拙き女と嫌ひみれせり。浴へ還
ひて後迎より側女も齎して生涯捨ぬ事あるは
親子が望此上なり。此黄金の僅ふと前か寸志



文太夫の物語



文太夫の親
子傳雅が
都中帰る
をあらわ

文太夫の物語 卷之四

文太夫

小のて

れが受納りて草鞋の代よりともさへ又此夜ハ
娘の手づから縫立するまじき。あなたが朝夕肌あつけこまや
渠も你と共侶み居みひとく。せめて心遣ひもする
んと思ふ是も親の痴情なりと。残りこまき文太夫が
真情とて支毎に博雅の感涙ととらあへぞ。押戴く
まあさめ寔や下室邑も忠信ありとの翁の事とゆめ
べき。吾若氣のあやまより牆を踰闕隙を鑽息文小
碓どのと密通しつるを憎しとも思ひ玉のぞ婿あし
家と譲らんとまで宣ひしを。固辞せしらせしも深き
情由ありと。今爰めて明白ふに述べし。都へ還り発

跡日もあり。頃小碓とを迎へて。宿の妻と定
むべし。といふ文太夫の斜るふに歎びやがて娘も斯と
言ゆせられ。小碓の今更博雅は別れん事の悲しき
かるきとあり。といふ。詮方なくともその迎を越さんと云さ
祭し。とみ漸く決をとり堅く舞をうつる。當時文太
夫の又苗別の盃をめぐりして。管侍りぬ。博雅の其
志の程を歎む數回思を謝し。静に行装して立
出る。渾家の者。迫別れを惜み。皆共侶は村に去る
で見送る。るる博雅の爰まで入る。對ひ何所まで
送る。るるとも名残の盃。さうが此処まで別れし

らせんとて。懇々眠て。立別る。文太夫小殿の
後影の見ゆまで。慨然として行く。霧の
離れへてられ。終る見てもありふり。

第拾八回 雪降小佛越

夫の扱ふは蟬丸の無腸道人の其夜。文太夫の家
を立退城隍の廟の中。みくね。兄弟が音信を待と
いへ。更なる来り。左右とも。東も。夜も。全
明る。私に面をつ。其辺り。文太夫の家
の動静を。豈とらんや。兩人とも。彼の
客人の爲。命をうし。如之。今まで。子。の。



無腸道人。と。の。渠等。同類。ある。よ。本
。那田。行。知。斯。賣。僧。と。知。此。日
。未。欺。れ。鈍。と。家。毎。日
。蟬丸。れ。を。大。駭。心。中。思。ひ。な
。穴。生。兄弟。も。容易。の。者。あ。ぬ。斯。愛。く。這。奴
。討。思。い。よ。渠。武。勇。悔。難。今。れ
。兄弟。が。恨。を。返。と。却。て。危。き。を。招。く。理。あ。り。
。千。介。の。弩。の。鼯。鼠。の。爲。は。癸。せ。此。謂。る。らん。ま
。づ。渠。を。拾。置。く。爰。を。走。る。み。ま。う。と。我。は。問。ひ。我。は
。答。て。即。時。に。演。を。立。ま。う。ね。扱。も。昌。泰。四。年。文。月

半年号改元あつて延永元年と号す四海暫らく
無異よりて穩る。斯く春太く秋来く白駒の隙
をまぐる。流水奔箭のごとく。早くも五年の月日と
ちく既に延永五年よりつ。蟬丸の此年来陸奥越
路を徘徊せしや山の神の教へし年月もくちぬ
れが今年の都へ登り帝都の動静をも物色しんと
遙く西をさして来りしが。ゆたかくて武蔵相模甲
斐と三國の境ある小佛峠といふ難所よりく
く。爰に名ふ。應人嶮岨よりて羊腸くる。細道苦
滑らうして殆ど行客の足を悩まし。哀しくなる時

猿の声幽みして心ある樵夫の腸を断しむ。怒り怪
岩奇石墨くくして高く古松老杉森くくして深
く茂り往來する嶺なれど蟬丸のこれと事とん
けは登りゆく比し。冬半よりてる深山幽谷の
事あれば。さへ打曇りて雪ちくくと降ふ。寒風
まきり肌をかうして絶えたる。とある山陰より樵
夫柴人の舍るべた為といふ。とある。四阿のあり
る。と見つけ。其裏より。枯枝を集め焚火しつ。
豫る準備して持来り。瓢を腰間よりとり出。
一盃をうごむりて居る所へ向ふの方より。年のよる

11



史外傳



彼の侍はあへて瓢の口よりあそくとつたて與ふるに付
 の只一息はぐりと吞や。頭を敲きて扱ふ。
 田舎酒はあへて蘭陵の美酒もまさる味はせ
 くと古鼓うつて賞さる。今一盃とさくむれに
 然りとて固辭や。又一息は吞やと蟬丸は返さる。
 蟬丸の枕より貯も持る。乾魚をとんで焚火の
 あへて侍はあへてふれに侍の押いさきする斯る時ふに
 只一椀の濁醪よて事足りる。若まで賜ふと願
 願ふはあれある幸ある。とさる美味氣はむさくと喰ふ。
 蟬丸の當時彼の武士に對ひ見まひられれば你の

此辺のううの人とも見へる。洛陽方の人と
 あがれたる此寒氣の時節何の用事う有。何
 方へ赴さるや。といふ侍もとや二三椀の酒めて全
 身もあへて。快くありと見て蟬丸は對言
 やう。何をうつむべた。吾侪の洛陽めて紀春光に
 とやを四方の雜掌の透原比茂次郎近勝とよ
 ばる者もさる。とさる吾主人春光卿帝より大
 切の内勅を蒙る。其おもむたを諸國の郡司目
 代へ觸知らる。廻文状を持て行者ある。とめく
 蟬丸再びいつくその寔は一くあるぬ。使はして

心利くる人あらでん勤めごと。故人の語も四
 ふ使いて獨君命を取く。めをるを士といふ。你
 等がごとく士をやめべうらん。とそや。とてられ
 勝み乗る。老人の詞まことと違ひ。此の使のあつ
 容易の者あての勤りごと。尚うよう武藏相摸
 りのふは更あり。下野陸奥のそて近も往ざれが
 らら。といふ。蟬丸の眉が蟬めその漸くは寒気
 み向ふ時あるはさこそ難美ふあつとらめ。抑いふる
 内執りて斯の火急は觸あら。くみや。苦くうら
 ざる語りせせると問られて比茂次郎近勝のそ

や酒気十分ふ飛く。これが最可の寒さもうらめ
 この一大事の緯ながら。你は酒を振舞れ。思と
 いひ且つる山中めて外は。やべた人もあられが。語り
 まひとせれど。穴く。人ふむ。漏ら。ぬき。其子
 細といふ。帝或夜竊み吾主人春光を近づく
 宣ふ。朕既は四十ふ余れどもいまだ。東宮は立べ
 ら男子あ。是平素は愁ひ思ひ。呼あ。ふつ
 け。情思ひ。とふ。二十歳あ。りの昔。の頃
 歌枕見んとて忍ひやう。近江のう。み下。あり
 から。美濃と近江の國境ある。跡物語村といふ

野の賤が伏屋ふしやに一夜の舎やどを覓もとめし。其家そのいへの娘むすめ鄙ひみの飾はれるる美うつく麗しと心こころとためき我われもあ
て白地あはれは相譚あひぐさひより。理ことある一夜の枕まくらをうき
其別そのわかるゝ及およびく。私わたくしは敦あつにひとあるよりをあらし。
又逢またあふまでの證しるし拠ととして一首の歌を殘のこし。その
歌うたは

忘わするふよ程ほどの雲井くもいふへどのとも

空そらもく月つきのめくゝあふまで

と朕われが筆ふでふてあゝくめてつうとせし。其後そのち絶ことへ
て音信おしづきある田舎人いなかひとの身みと恥はづらひく名乗なのかりて

出いぬ。又また亡者みれいの數かずふや入いり。倘なりや渠みち朕われが一夜の
情なさけと感かんへ懷胎えんたいあとせんももうが。汝なんぢ何卒なにとぞ
その女おんなの生なま死し存ぞん亡ぶつをゆゑ正ただし。万よろずはツル世よは存ぞん
命いのちて有ある。又また朕われが腫はれを宿やどし。あふれせざる。よく
詮せん美みせんもの汝なんぢより外ほかあるべからず。余われ美みなき
詔みことは詮せん術じゆつなく傾かたむは彼かの寂物語しやくぶつご村むらをささげし。ふ
苟なほ且かつみふ二昔ふたむかしも過すせし事ことあるれば慥たしかに識しる人ひとは
なく。或あるは死しせうといふるあり。又また否いなく其娘そのむすめの内うち
都とくこの人ひとの種こゝろを身みみやと。男子おのこやち女児めづこや
ら産うかとせし。其後そのち父ちちなり。子産こぞんするをうし。る

めく思ひやえけん踪跡をれど。まど終くとて
定まらば。帝の此より。其女は。郷人
ことわざ。男子を産とらん。則ち朕んが種
ふいて。よ。民間の成長と正しく。實柞を由づ
るべたりのふ。六十余の隈。をさぐ。見ゆる。ハ
知れどといふ事。あら。其より。諸國へ。廻文状
をもて。觸ら。又國くは。新関を建。往
来との旅客の。本貫郷里をあら。此の世は
存命あるものあら。知れどといふ事。あら。と
頻る。震襟をあら。從來天忠無二の

春光郷さほぐ。思慮をめぐら。是容易
の事。あら。あら。詮を時。一天の君の
脚恥辱を天が下へ。知らをふ。内
勅命を。諸國へ。其女を。見
とて。吾侪を。一五十一を。語。此使
節を。せん。外。疾。内命の
勅書を。此。諸國へ。知らせ。機密の使
を。甲某。洛陽へ。帰。其日。酒。一粒
萬倍。恩を。返。時。あら。と。説。示。を。

蟬丸の始終黙然とゆづあり。此時漸くさ
 あぐ。盲亀の浮木優曇花の春ふもあつる。話
 不便ふも汝の命。今の酒價は貴ふ。このより
 早く近勝り帯せし刀拔よと見。前ふ
 落ふ。

半月夜話後編卷之四

藥種相成

下るる父ぬ

里
 飯島三省

